

## 民のかまど

の だ よしひこ  
野田 佳彦  
財務副大臣



昨年、歴史的な政権交代を果たし発足した鳩山内閣において、図らずも財務副大臣を拝命いたしました。私は以前より「政権交代の意義は国の資源配分を変えることだ」と唱え続けてきましたが、自らがそのことに直接携わる立場となり、重い責任と厳粛な使命を強く感じながら身の引き締まる思いで職務に取り組んできました。

この間、藤井裕久前財務大臣には短い期間ではありましたが懇切丁寧なご指導を賜りました。この度、健康上の理由で職を辞されることとなり、警咳に接することが叶わなくなるのは誠に残念ですが、今後一層精進してご恩に報いていきたいと思っております。

後任の菅直人新財務大臣は、昨年来副総理兼国家戦略担当大臣として成長戦略の策定などに指導力を発揮されてこられました。これから、いよいよ新政権として初めての予算審議が始まり、さらに次々年度予算編成の準備にも入っていきます。菅新大臣をしっかりとお支えし、大所高所に立った力強いご指導を仰ぎながら、予算編成の透明性を一層高め、予算の必要性、効率性を徹底して精査し、各界各層の英知を結集して、より良い国の資源配分ができるよう微力を傾注していく決意です。

私は以前、伊勢神宮を参拝した折、外宮で毎朝毎夕、「日別朝夕大御饌祭（ひごとあさゆうのおおみけさい）」というお祭りが行われていることを知りました。前夜からお籠もりし身も心も清めた神官が天照大神にご飯や野菜などをお供えして祝詞を奏上し、「日本の全国民が今日一日、食べ物に不自由しないように、幸福であるように」と祈るのです。それが千五百年もの間、毎日続けられてきたことに、私は言い知れぬ感動を覚えました。ここにこそ、日本の政（まつりごと）の原点があると思ったのです。

はるか昔の仁徳天皇の善政にも、政治のあるべき姿が示されています。難波高津宮から遠くをご覧になった仁徳天皇は、人家から炊煙が上がっていないことを深く憂慮され、「貧しくて炊くものがないのだろう、都がこうなら地方はなおひどいだろう」と仰せられました。そして三年間租税を免除し、その間は率先して儉約に努められ、三年後、どの家のかまどからも煙が立ち上っているのをご覧になって、こう詠まれました。

高き屋にのぼりて見れば煙立つ  
民のかまどはにぎはひにけり

それから約千七百年。鳩山政権に求められているのは、本気で民のかまどを思う政治を行うことだと思います。国の財政は国債発行額が税収を上回るという昭和21年度以来の厳しい状況にあり、世界経済も低迷が続く中、租税を免除することなどもちろん、たちまち民のかまどから炊煙が上がるような景気回復策を見つけることも困難だと認めざるを得ません。しかし、苦しい状況にある今こそ、知恵をしまり、税金の使い方を工夫し、民のかまどを最優先課題とする日本古来の政治を実現するため力を結集していかなければならないと思っております。